

## メディア表現学会(仮称):オンラインにおける表現とプラットフォームを「共集性」から考える

開催:2021年7月22日(「IAMAS OPEN\_HOUSE: 2021」)

第1部 話題提供:岩城京子、小林茂、藤木良祐、伊村靖子、三輪眞弘+前田眞二郎

第2部 コメント:小御門優一郎、高山明、クワクポリョウタ

第3部 ディスカッション:松井茂(司会)

(本文構成:深井厚志)

### 配信をめぐる表現の現在を問う

松井茂(Archival Archotyping, IAMAS)

本シンポジウムは、小林茂さんが代表を務め、クワクポリョウタさんと私も参加するプロジェクト「Archival Archotyping」の企画として開催します。また、IAMASのオープンハウスの企画の一環としても行っております。

はじめに、本シンポジウムの趣旨をご説明するとともに、登壇者をご紹介します。2020年来、世界中どこもかしこもCOVID-19の影響を様々に受けることとなり、本学でも、オンラインによる表現活動を模索せざるをえないという状況にあります。それまでは対面を代替的に行う技術としてオンラインを捉えていたかもしれませんが、こうした状況が継続するなかで、オンラインだから考えられることや、むしろオンラインによってこそ実現できることがあるのではないかと、考えるようになったところがあります。

私の関心でテーマを選ぶならば、1点目が、プラットフォームの問題です。展示をオンラインで行おうと思うと、劇場や美術館、ギャラリーといった従来の展示空間と同じような代替空間を3次元につくって、そこで同じように何かを展示する。そういうバーチャルな再現性を重視する考え方が一般的になろうかと思います。しかし、代替という考え方を貫く限りは現実には追いつかないわけです。となると、やはりプラットフォームを自立的に考えてみるという観点があるかと思っています。

2点目は、鑑賞体験の変化がテーマになってくるだろうと考えています。これは、おのずとそのプラットフォームをどのように体験するかということにも繋がっていて、同時に、リアルタイム性や現前性といった、それまで芸術が自明としてきた価値概念への問いが、ここに出てくるだろうと思います。

こうした芸術概念への問いと合わせて出てくるのが、今まで我々が芸術の歴史として考えてきたものとは異なる「配信」という文脈です。私の研究の関心で言うと、テレビジョンが再発見されつつあるのではないかと思います。私が1960年代のアートとテレビジョンの関係を研究していることもあり、コロナ禍のオンライン化で、ある意味すべてが映像化されていく、動画化していく状況を考えて時に、これまでの芸術の歴史では補助線に過ぎなかったサブテーマが、補助線ではなく、むしろ非常に太い線に切り替わってくるのではないかという気がします。振り返ると、テレビ放送は、演劇を中継するところから始まり、のちにテレビの中で自立する演劇として、テレビドラマが表現形式として成立しました。コロナ禍のこの1年間は、ある意味ではそういった文脈を再確認しながら、オンラインのプラットフォームは展開してきたという性格があるかと思っています。

こうした状況へのいち早い対応として、「配信の政治——



「ライブとライフのメディア」をテーマに掲げた、表象文化論学会の『表象』15号(2021年5月20日発行)があります。これには「オンライン演劇は可能か 実践と理論から考えてみる」というタイトルの座談会が収録されており、そのなかの、本シンポジウムでもご発表いただく岩城京子さんの次のような発言が印象に残りました。演劇の概念自体に注目した時に、「共集性=gathering」、つまり共に集まるということが演劇を成り立たせていたのではないかと。ならばオンライン演劇は、どのようにそういった概念を担保できるのか、あるいは改変しなければならないのか、そういった議論がここから生まれるのではないかと拝見しました。

ところで、「配信」は英語では「distribution」になり、この語は、植物の用語として使うと「分布」という意味があります。この「distribution」という語には、ジャック・デリダの「dissemination=散種」を再解釈をする手がかりがあるのではないかと思います。言ってみれば、オンラインでの配信という現象は、インターネット上の「Architecture」や「Institution」など様々な社会制度を解体的に捉え直す機会と考えられることでしょう。そういった幅の議論もできればと思います。

また本シンポジウムでは、オンラインの表現とプラットフォームの不即不離の状況のなかで、2020年からの活動として非常に注目を集めた劇団ノーミーツの藤木良祐さんと小

御門優一郎さんにプレゼンテーションとコメントをいただくことになっております。また、コメンテーターとして高山明さんをお招きしております。高山さんは対面形式の劇場空間に対して、非同期的な演劇のあり方ということ提起されていて、そういった意味では、今の状況というのはある意味、チャンスのように捉えているかもしれないなど、様々な観点からのご意見を期待しております。

先ほど触れた鑑賞体験のあり方という点では、伊村靖子さんにオンラインの展覧会に関して批評的な観点からのご報告をいただく予定です。そして、三輪真弘さんと前田真二郎さんは、「三輪真弘祭」というタイトルで、配信のみの音楽/映像作品でもあるパフォーマンスを2020年に行っておられ、これに関してお話いただきたいと思っています。そして、Archival Archotypingの私どものプロジェクトから、小林さんとクワクボさんにお話いただきます。小林さんからは、今回行っている、このオンラインのオープンハウスでも使用している、IAMASがDIY的に構築したプラットフォームである《i.frame》の設計思想に関して、ご報告をいただこうと考えております。これらの発表や議論を通じて、何か結論めいたところに導くのではなく、多様な表現、多様な問題点を明らかにしていく機会にできればと思っています。